

【論文】

『梅光言語文化研究』第3号(2012年) pp. 1・16
@2012年 梅光学院大学国際言語文化学会

談話の構造と談話標識

松尾文子

要旨 The aim of this paper is to investigate the functions of discourse markers mainly in conversation. In Chapter 1, I will discuss what is a discourse. In Chapter 2, I will focus on the textuality of a discourse. In Chapter 4, I will give general views of discourse markers. In Chapter 5, I will illustrate the use of discourse markers in written texts. Chapter 6 deals with a variety of conversational structures. In Chapter 7, I will explore the functions of discourse markers in conversation.

キーワード：談話標識、談話の構造、会話の構造

1. はじめに

松尾(2011)で、会話をうまく進めるために、すなわち会話のゴールである social interaction を首尾よく達成するために、談話標識が戦略的に用いられることを論じた。戦略的使用の例として、対人関係に関する機能 (face-saving) と発言と場面の主導権を管理する機能について述べた。本論では談話標識の機能を会話の構造から捉えなおす。2章では談話とは何か、3章では談話のテキスト性、4章では談話標識の概観、5章では書き言葉での談話標識の使用、6章では談話標識と関りのある会話の構造、7章では実例をあげて談話標識の会話における機能を論ずる。

2. 談話とは何か

談話(テキスト;以後原則的には談話とする)とは何か?¹ 大雑把に言えば、いくつかの文(発話)がつながりを持って並べられたものである。しかし、談話は単に文を並べたことばの単位ではない。ことばは常に communicative で、現実世界の文脈の中で用いられる。ことばは実際の言語使用の場で機能し、その場には話し手と聞き手が存在する。話し手と聞き手は話の内容やすでに持っている背景知識や発話の場の状況などを含む広義の知識を互いに確認・管理しながら談話を進めて行くので、談話は

ことばの単位であるだけでなく、動的な社会的相互作用 (social interaction) の過程でもある。このことは会話では顕著に現れるが、スピーチなどの原稿のある話し言葉でも、書き言葉にも当てはまる。スピーチや書き言葉では話し手 (書き手) と聞き手 (読み手) が相互に関り合いながら談話を作り上げて行く動的なプロセスが会話のようには見られないが、聴衆や読み手を想定して談話を構築するのであるから、そこで用いられることばは communicative で現実世界の文脈の中で機能しているのには違いない。

3. 談話のテクスト性

談話分析 (discourse analysis) の分野では、言語学のみならず社会学、認知科学、心理学、コミュニケーションなど様々な視点から理論的、実践的な研究がなされている。具体的な項目としては、指示や結束性 (cohesion)、首尾一貫性 (coherence)、丁寧表現 (対人関係)、談話理解などがある。これらの中でも、談話のテクスト性を支えるつながりとして、結束性と首尾一貫性は重要な概念である。

結束性は文法的・語彙的手段という言語形式によって作られるテクスト内の意味的まとまりである。Halliday & Hasanによると、文法的結束性には指示、代用、省略、接続が、語彙的結束性には再叙 (同義語や上位語など)、コロケーションがある。

首尾一貫性は言語的内容から得られる知識と話し手と聞き手の知識や文脈が結びついて生まれるもので、話し手は談話において意思伝達が達成されることを目指す。首尾一貫性が保たれていれば結束性がなくても談話は成立するが、その逆は不可能で、首尾一貫性の方が優位である。

談話標識は発話と発話や文と文の接続関係を表して談話の結束性の維持に貢献するが、首尾一貫性、つまり意思伝達の成功を担保する要素としても貢献する。このことは、会話で明確に現れる。

4. 談話標識

談話標識には接続詞、接続副詞、副詞、間投詞、you know、I mean、by the wayなどの定型表現が含まれ、談話の中で文脈と結びついて様々な機能を持ち、種々の談話情報を与える。談話情報には、発話と発話の内容的な関係、話し手の意図や態度、話し手と聞き手の関係、談話の流れの方向づけや談話構造などがある。同一の表現でも文脈によって機能が変わる語用論的な項目であり、多機能である。²

談話標識が発話で直接的に表される情報をつなぐだけではなく、種々の談話情報を

与えることは次の例で分かる。

(1) a. A : It's two o'clock. B : *Oh*.

b. *You know*, it's two o'clock.

(Jucker & Smith p,173)

(a) では、BはAの「2時だ」という情報を新しい事実として認識しただけではなく、たとえば会議に行く時間だというようなAの意図も理解している。(b)では、「2時だ」という事実を聞き手が知っている述べているのではなく、たとえば「会議の時間だよ」と聞き手に確認している。

次に、談話標識の研究の歴史を概観する。談話標識が注目されるきっかけとなったのが James (1972) で、間投詞は単なる感情表現ではなく話し手の意図表現であるとした。Lakoff (1975) は、発話の意図を理解するには話し手と聞き手の共有知識を考慮する必要があるとした。Sinclair & Coulthard (1975) は談話分析の立場から、談話の構成 (organization) や型 (pattern) の理論を立て、談話標識がそれに関ると考えた。Halliday & Hasan (1976) は結束性や首尾一貫性などの概念を用いてテキスト分析を行い、接続がテキストを成立させる一つの要素だとした。たとえば、finallyの「(時間的に)最後に」の意味がコミュニケーションの場に拡大されると、「(要点をまとめて)最後に、結論を言えば」の意味を持つようになる。van Dijk (1979) は接続語が pragmatic connective として用いられることがあり、その場合当該の語の意味論的条件が語用論的妥当性の条件の基礎となっていると述べた。

1960年代から1970年代にかけて、エスノメソドロジー (ethnomethodology)³の一分野として会話分析 (conversation analysis) が発展し、社会学者のSacks, Schegloff, Jefferson や Labov が中心となった。この流れで Schiffrin (1987) が談話標識の研究を一躍表舞台へと導き、現在でも大きな影響力を持つ著書を記した。彼女は会話を参与者の相互行為 (interaction) であると捉えた。Philadelphia 近郊在住のユダヤ系アメリカ人の会話を分析し、談話標識は発話の連鎖における話の単位の境界を示す機能を持つ (sequentially dependent elements which bracket units of talk (p.31)) とした。また、談話標識は談話モデルを構成する5つの planes (ideational structure, action structure, exchange structure, information state, participation framework)⁴ で作用しながら談話に一貫性を与える機能を持つ。

一方で認知科学の発展に伴い、1980年代半ばから認知言語学が大きな潮流となる。その中心の一つである Sperber & Wilson (1986, 1995²) の Relevance Theory を援

用して、Blakemore (1987) は、談話標識は発話処理の方法や意味上の制約を導き、話し手が意図するように聞き手が発話を解釈するのに役立つ手続き的意味を伝えるとする。同様に Fraser (1990, 1997) も談話標識を手続き的意味を伝えるものとし、前のメッセージと後のメッセージとのつながりの関係を示す語用論標識 (pragmatic marker) の一種で、話し手がメッセージを聞き手にどのように伝達するつもりであることを示すシグナルだとする。

5. 書き言葉における談話標識

書き言葉の談話は話し言葉とは異なり、書き手と読み手が交替しながら談話を進めたり、読み手の反応を見てその場で表現を選ぶというような dynamic で相互的な特徴は見られない。また、書き手には、何をどのように伝えるかを考える時間がある。しかしながら、書き手は読み手が談話をどのように解釈するかや自分の意図を効率よく伝えるにはどうすればよいのかを念頭に置いて談話を構成する点においては、話し言葉と同じである。例をあげる。

- (2) A dictionary takes a word-level view of language: language is organized as a list of words. Grammars, *on the other hand*, take a sentence-level view of language: language is described in terms of the rules that govern the formation of acceptable sentences. *By contrast*, a discourse-level view of language takes discourse as its primary unit of analysis. Discourse is the way that language is used to construct connected and meaningful texts, either spoken or written. It is a view of language, *therefore*, that extends 'beyond the sentence'.—*Macmillan English Dictionary*² 辞書は語レベルでことばを捉える。ことばが語のリストとして整理されるのだ。一方、文法は文レベルでことばを捉える。容認可能な文の作り方を定める規則という観点からことばが記述されるのだ。対照的に、談話レベルのことばの捉え方では、談話が分析の重要な単位となる。談話とは、話し言葉であれ書き言葉であれ、つながりがあり意味の通じるテキストを構成するためにことばが使われる方法である。したがって、ことばを「文を超えた」レベルで捉えることになる。

on the other hand と by contrast によって前文と後続文の内容的な対比が、therefore によって結論が示される。

次は、追加を表す *moreover* の例である。

- (3) A man in a tuxedo. How much easier to identify could a suspect be? Even if Rémy changed clothes, he was partnered with an albino monk. Impossible to miss. *Moreover*, they had a hostage and could not take public transportation.—Brown, *Code* タキシード姿の男。容疑者を見つけるのにこれ以上に簡単なことがあるだろうか。たとえ Rémy が着替えたとしても、色素欠乏症の修道僧と一緒にいる。見失うはずがない。その上、彼らは人質を連れているから、公共の交通機関は使えない。

容疑者を見つけるのが容易であることの正当性の主張が 3 点 —タキシード着用、色素欠乏症の修道僧と同行、人質を連れている— 述べられ、3 点目に追加を表す *moreover* が用いられている。

次は項目を列挙する *first*, *then* の例である。

- (4) Justin was having difficulty coordinating. *First* he had to wait for the sound of Woodrow's words to catch up with him. *Then* he hastened to respond in brisk, hard-won sentences.—le Carré, *Gardener* ジャスティンは相手に合わせるのに苦労していた。まず、ウッドロウの言葉の音を捉えて理解するのに時間がかかった。それから急いでいたので早口で何とか文になった形で答えることになってしまった。

first と *then* によって苦労している理由が複数あることが分かり、談話の構造が明確になる。

このように、書き言葉では文と文、パラグラフとパラグラフの意味的・論理的つながりや (例 2、3)、談話の構造を示す (例 4) 談話標識が多く用いられる。それに対して、*you know*、*I mean*、*well*、*actually* など発話の場で話し手と聞き手の知識状態を確認したり、対人関係を調整する談話標識はほとんど用いられない。また、同じ機能を持っていても *besides* は主に話し言葉やくだけた書き言葉で、*furthermore* は書き言葉で用いられるというような違いもある。

6. 会話の構造と談話標識

会話分析は、会話を録音して文字や記号で書き起こしたものを資料にして会話の構造やルールを明らかにする。それによって、一見無秩序に思えるやりとりが以下で記すように systematic であることが分かる。

Labov (1972: 252-258) は、私たちが持っているつながりのある談話とそうでない談話を判別する直観や首尾一貫性の仕組みを解明しようとした。会話の首尾一貫性は、会話の参与者間の動的プロセスの結果 (Schiffrin 1987: 28) である。会話は参与者が互いの理解の状況を確認し合いながら伝達上のゴールを目指す相互活動であり、双方向性 (interactive) という特質を持つからである。

談話標識は談話に首尾一貫性を与えるのに寄与するが、会話では発話の内容レベルでの接続機能の他に、やり取りの進行に応じて話者交替をスムーズに行ったり、参与者の人間関係を調整したり (politeness や face に関する)、話題の展開を明確にしたりといった談話的な情報を与える。

次に会話を systematic に構成する手段で談話標識が関るものを挙げる。

- ① 話者交替 (turn-taking) : 会話は参与者が交互に話者交替を行うことで成立する。Sacks, Schegloff & Jefferson (1974) は話者交替が行われる場である移行関連場 (transition relevance place) を規則化し、発話が終了したところで話し手がポーズを置き、そこが次の話し手へ交替するのに適切な箇所だとした。
- ② 隣接ペア (adjacency pairs) : 会話では隣接した発話がペアを成して、ペアの第1発話によって第2発話が決まる場合がある。質問 / 返答、招待・申し出 / 受諾・拒否、要請 / 許可・不許可、情報の要請 / 情報の提供、苦情 / 謝罪・弁明、呼びかけ / 応答などである。
- ③ 会話の終結 (closing) : 会話ではどのようにその会話を終わらせるかが重要で、一定のパターンが見られる。参与者は話者交替のプロセスを通して協同で会話を終結させる。会話の終わりの部分を終結部と言い、典型的なパターンでは前終結部 (pre-closing) で新たに話題を導入しないことや会話を終了することに対する同意が表される。さらに続けて会話の終わりを確認する。以下のようなパターンである。
A: O.K. B: O.K. A: Bye bye. B: Bye. (Schegloff & Sacks 1973: 317)
- ④ あいづち (back channel) : 聞き手が話し手に対して使う短い発話で、会話進行を促進したり相手への同意や理解を示したりして、協調的に会話を進める機能を持つ。
- ⑤ フィラー (filler) : あいづちが聞き手の発話に関するものであるのに対して、フィ

ラーは話し手自身の発話内で生じ、発話の一部を埋める。自分の発言権を維持したり、ターンの終わりで発言権を相手に渡すために用いられることがある。

- ⑥ 言い淀み (hesitation) : フィラーの一種で、自分の考えがまとまっていなかったり、適当な表現が見つからない時の口ごもり現象。
- ⑦ テーマ展開 (thematic progression) : 談話におけるテーマ (話題) がどのように始まり、展開し、終結するかを示す。新しい話題導入、話題転換、サブトピックの導入 (本題からの逸脱など)、本題への回帰などを合図する。

次章では会話の構造に談話標識がどのように関わっているのか、具体例をあげて説明する。

7. 会話で用いられる談話標識の実例

以下の例ではそれぞれの発話に記号を付けるが、話者交替を分かりやすくするために、映画の台本以外からの引用では同一話者のターン内の発話は見出しの記号の位置を下げる。

Jane のアパートに妹の Tess がやって来た。Jane は Tess に自分の仕事の話をするが、Tess は話も聞かずに手にローションを塗りつけている。

(5) Jane : (a) Yeah. Never mind. It's not really your thing.

(b) *So, um, how long you stayin' for?*

Tess : (c) *Um, a week or two 'cause the fall fashion shows are done, so I don't have much work.*

Jane : (d) *Oh, speaking of work, I am meeting up with some people from the office tonight for a party.*

(e) You wanna come?

Tess : (f) *Actually, I'm having drinks with some friends from Milan.*

Jane : (g) All right.

(h) *So, let me get this straight.*

(i) You would rather go have drinks with Italian models than come to my awesome work party?

Tess : (j) *Weird, huh?—Dresses* [映画台本] 「いいわ、気にしないで。興味ないわよね。で、そのう、どれ位ここに居るの?」「そうねえ、1、2

週間かしらね。秋物のファッションショウが終わってそんなに仕事もないから」「ああ、仕事と言え、今夜、オフィスの仲間が集まってパーティをするのよ。あなたもどう?」「実は、ミラノの友だちと飲みに行くことになってるの」「そうなの。じゃあ、はっきりさせときましょう。私の素敵な仕事のパーティに来るよりも、イタリア人のモデルと飲む方がいいってことね」「変でしょう?」

(b)の *so* で話題を転換しようとするが、話に興味のなさそうな Tess の様子を見てすぐにことばを続けられず、*um* というフィラーによって発言権を維持しておいてから質問する。(b)(c)は[質問 - 返答]のペアで、*um* によって Tess は返答を考え中であるが答える意思はあることを示す。同じターン内の *so* は結果を表し、「ファッションショウが終わったので仕事はあまりない」となる。(d)では “*Oh, speaking of...*” で新たな話題が導入され、(e)で示されるパーティに誘う背景が説明される。続いて(e)(f)は[勧誘 - 拒否]のペアとなり、(f)で話者交替が起こる。勧誘に対しては承諾か拒否の意向を示さなければならないが、(f)では *actually* によって期待に添わない返答が続くことをあらかじめ合図して相手に対する配慮を示し、後続部分では “*no*” と直接的な表現で拒否するのではなく、誘いに応じられない理由を述べることで間接的に拒否を表す。(f)の拒否という状況を受け入れたことが(g)で示され、その結果 Jane は(h)の *so* 以下で表される行動 (speech act) に出る。(i)(j)は[質問 - 返答]のペアで、(i)では Jane は(f)の Tess の発話の意図を確認し、(j)でそれに対して返答される。

次はあるホテルの支配人の Bextrum が従業員に話をする場面である。

(6) Paula : (a) Friday morning, people! Lots to do. Heads up. Mr. Bextrum has an announcement to make.

Bextrum : (b) Good morning. Excuse me.

Paula : (c) Mr. Bextrum.

Bextrum : (d) Christina Howard's promotion has created a vacancy that we've decided to fill... with in-house personnel.

(e) Perhaps one of our butlers?

Steph : (f) Excuse me, Mr. Bextrum, sir?

Bextrum : (g) Yes, Miss Kehoe?

Steph ; (h) *Uh*, can a maid apply?

Bextrum : (i) *Uh, well, technically, if an employee's been here for three consecutive years, he or, indeed, she, is qualified to apply.*

(j) *So yes. Sure. Absolutely. Why not? Everything is possible.*—
Maid [映画台本]「金曜日の朝です、皆さん！仕事がたくさんあります。顔を上げてください。Bextrum さんからお知らせがあります」
「おはようございます。よろしいですか」「どうぞ、Bextrum さん」
「Christina Howard が昇進したのでポストが空いていまして…、組織内の人事で補充することになりました。執事の中から誰かどうですか？」「すみません、Bextrum さん、ちょっとよろしいでしょうか」「ええ、何でしょうか Kehoe さん？」「そのう、メイドは応募できますか？」「ええっと、そうですねえ、厳密に言えば、3年間連続で務めた従業員ならば、男性でも、いや、女性でも応募する資格があります。だから、あなたもできます。もちろん。当然です。いいですよ。どんなことでも可能です」

(a)~(g)で上司と従業員のやり取りが続き、(h)で Steph が質問をするが、執事ではなくメイドの身としては尋ねにくいのでためらいを表す *uh* が用いられる。それに対して Bextrum は(i)ですぐには返答しない。Steph の質問が意外な内容だったので、“*Uh, well*” で返答する意思があるけれど言うべき内容を思案していることが示される。(i)の内容から導き出される結論が(j)の *so* 以下で述べられるが、同時に(h)に対する返答にもなっている。

次は連邦裁判所の2人の執行官が Mark という少年を未成年者短期拘留所に訪ねた場面である。

- (7) (a) “What are they?” he (Mark) asked nervously.
(b) “It's a grand jury subpoena, …” …
(c) “Have you told my mother?”
(d) “*Well, you see, Mark, we're required to give her a copy of these same papers. We'll explain everything to her, and we'll tell her you'll be fine.*
(e) *In fact, she can go with you if she wants.*”
(f) “She can't go with me. She can't leave Ricky.”
(g) The marshals looked at each other. “*Well, anyway, we'll explain*

everything to her.”

(h) “I have a lawyer, *you know*. Have you told her?”

(i) “No.

(j) We're not required to notify the attorneys, but you're welcome to call her if you like.”

(k) “Does he have access to a telephone?” the second one asked Telda.

(l) “Only if I bring him one,” she said.

(m) “You can wait thirty minutes, can't you?”

(n) “If you say so,” Telda said.

(o) “*So*, Mark, in about thirty minutes you can call your lawyer.” Duboski paused and looked at his sidekick.

(p) “*Well*, good luck to you, Mark. Sorry if we scared you.” They left him standing near the toilet, …—Grisham, *Client* 「何（の書類）ですか？」

彼は神経質そうに尋ねた。「大陪審への罰則付き召喚令状だ。…」 …「お母さんには話したのですか？」「ええと、あのね Mark、お母さんにはこの同じ書類のコピーを渡すことになっている。全部説明しておくよ。きみが元気なこともね。実のところ、お母さんが希望すればきみと一緒にいっても構わないんだよ」「お母さんには無理です。（弟の）Rickyを残して行けませんから」執行官たちは顔を見合わせた。「まあ、ともかく、お母さんには全部説明するよ」「ぼくには弁護士がいるんですよ。彼女にはもう話したのですか？」「いや。弁護士に通達することを要請されていない。しかし、望むなら弁護士に電話しても構わないよ」「この子は電話を使う権利があるのか？」ともう1人の執行官が Telda に尋ねた。「私が持ってくれば」と彼女は答えた。「30分待ってもらえるかな？」「そうおっしゃるなら」と彼女は答えた。「ということで、Mark、30分ほどしたら弁護士に電話してもいいよ」Duboskiは一息ついて相棒に目をやった。「じゃあ、幸運を祈ってる、Mark。怖がらせてすまなかった」彼らは彼（Mark）をトイレのそばに立たせたまま出て行った…。

(a)(b)、(c)(d)はそれぞれ[質問 - 応答]のペアである。(d)では“*Well, you see*”で相手の少年の注意を引きつつ発言内容がきつくならないように少年に配慮していることも示して返答する。同一ターン内の(e)では *in fact* 以下で(d)の内容をサポートする内容が述べられる。(f)ではそれに対する少年の応答があり、(g)で執行官はこの話題を終え

ようとして “Well, anyway” と言う。しかしそれがうまく行かず話者交替が起こって、(h)で少年は you know で執行官の知識の状態、すなわち「自分には弁護士がいる」という情報を共有していることを確認した上で反論を挑む。⁵ (h)の少年の質問に執行官は(i)で返答して(j)で返答の正当性を主張する。(k)～(n)は執行官と拘置所職員の Telda のやりとりになる。(k)(l)、(m)(n)はそれぞれ[質問 - 応答] [依頼 - 承諾]のペアである。(o)は so で執行官が話題を転換し、一連の会話を終結に向かわせようとする前終結部であり、さらに(p)の well 以下の発話で会話を終結させる。

次は片手を失った少年 Kemal と医師のやり取りである。

(8) (a) Kemal asked, “Does it move?”

(b) Dr. Hirschberg said., “Kemal, do you ever think about moving your hand?”

(c) I mean the hand that isn't there any longer.”

(d) “Yes,” Kemal said.

(e) Dr. Hirschberg leaned forward. “Well, now, whenever you think about that phantom hand, the muscles that used to work there will contract and automatically generate a myoelectronic signal.

(f) *In other words*, you'll be able to open and close your hand just by thinking about it.”

(g) Kemal's face lit up. “I will? How—how do I put the arm on and take it off?”

(h) “It's really simple, Kemal…” —Sheldon, *Sky* Kemal は尋ねた。「それ(義手)は動くんですか？」Hirschberg 博士は答えた。「Kemal、手を動かそうと思ったことはあるかい？つまり、なくなった手のことだけど」「あります」と Kemal は答えた。Hirschberg 博士は身を乗り出した。「それでだなあ。失ってしまった手のことを考えるたびに、かつては機能していた筋肉が反応して自動的に筋電シグナルを発するんだ。つまり、手のことを考えるだけで手のひらを開けたり閉じたりできるようになるということだよ」Kemal の表情が明るくなった。「そんなことができるの？どうやって—どうやって(義手を)つけたり取ったりするの？」「とても簡単なことだよ」

(a)(b)は本来ならば[質問 - 返答]のペアとなるところが、博士はすぐには返答をせずに

(b)で(a)に対する返答の前段階となる質問をする。(b)と同一ターン内の(c)では I mean によって(b)の “your hand” の説明を話し手自らが付け加える。相手が正しく理解できるように配慮しているからである。次の発話(d)は(b)の返答となっている。(e)の “Well, now” で博士は話を次の段階(失った手に関するサブトピック)に進める。さらに(e)と同一ターン内の(f)では、(e)の専門的な内容を in other words 以下で分かりやすく言い換えて説明する。素人である患者の理解度を懸案してのことである。(f)の説明を受けて(g)で質問が、それに対する返答が(h)で述べられるという展開をたどる。

次は Marisa と Chris の公園での会話である。ごこちない雰囲気ではじめられる。Marisa がベンチに雑誌を置いて座ろうとするが、その表紙には Chris の写真が載っているのに気付く。

(9) Marisa : (a) Okay. Oh, cool. I won't get dirty.

(b) Oh, Lord! I almost sat on your face. Right there.

Chris : (c) *So, um, Ty seems like a terrific kid.*—*Maid* [映画台本]「まあ良かった。汚れなくていいわ。まあ、何てこと！あなたの顔の上に座るところだったわ。ちょうどこの所に」「ところで、えー、(君の息子の) Ty はいい子のようなね」

Marisa は(b)で表紙の写真に気付く。Chris は会話をどう続けていいのかわからず、(c)の so でとりあえず発言権を獲得して um で発言権を維持し、話を続けようとする。このような so はそれまで話されていた話題が一段落し、すぐに別の話題が始まる気配がないような場面でとりあえず会話をつなぐ機能を持ち、しばしば um と共起する (Bolden 2009: 990)。⁶

8. おわりに

会話は複数の参加者が交互に話者交替を行うことで成立するが、話者交替を引き起こす要因の一つに隣接ペアがある。第1発話の終了後に話者交替が起こって、当該の第1発話によって求められる形の第2発話を次の話し手が発する。例に挙げた[質問-返答][勧誘-拒否]のペアが会話では頻繁に見られる。質問に対して肯定の返答や質問者の予想や期待に沿う返答をする場合はそのまま返答が提示されるが、そうでない場合、しばしば well、actually、um、you see などの談話標識が単独で、あるいは複数語句が組み合わさって用いられる(例 5、6、7)。これらの談話標識は、相手の意

に沿わない応答をすることに対するためらいの気持ちを表したり、相手の意に沿わない応答をすることをあらかじめ合図したり、思案中であることやことばを探していることを示すと同時に、話し手に応答の意思があること、つまり発言権の維持の意思も示す。同時に、相手との人間関係を慮った対人関係調整表現の機能も果たす。well や um はフィラーの一種の言い淀みであるが、発言権の維持の機能を担う場合もある(例 5、9)。

談話における話題の展開を明らかにすることも会話では重要なことであるが、so、now、anyway などによって話題を転換したり、新しい話題を導入したり、サブトピックを導入することを明示する(例 5、7、8)。また、一連の話題を展開してきて会話を終わらせたい場合、前終結部と終結部で so、well anyway などが用いられる(例 7)。これらはターンの替わり目で用いられる典型的な談話標識であるが、同一ターン内(同じ話者の発話内)でも話題の展開の合図(例 5)や発言権の維持(例 5)の機能を持つ談話標識が用いられる。同一ターン内で用いられる典型的な談話標識は、自らの発言内容に関するもの、たとえば前言の結果を表す so(例 5、6)や前言の内容をサポート(正当化・説明)する in fact(例 7)などがある。

これらの他に会話ではお互いの理解度(知識の状態)を確認する談話標識がしばしば用いられる。たとえば、共有知識であることを相手に確認して共感を求める you know(例 7)、相手の理解度を高めるために説明を加える I mean や in other words(例 8)などである。

談話標識はこのような種々の談話情報を与えることで、会話の参加者の動的プロセスの結果生じる会話の首尾一貫性、つまり意思伝達の成功に寄与している。

注

1. ヨーロッパ言語学では談話のことを「テキスト」と呼び、テキスト言語学ではあらゆる形態のテキストの構造を支配する言語的原理を研究することを主眼としている。一方、会話やインタビュー、スピーチなどの話し言葉を「談話」と呼び、エッセイ、新聞、広告、書物などの書き言葉を「テキスト」と呼び区別する場合もある。(中島(編), p.175)
2. Schourup (1999) は談話標識の特徴を(1) connectivity (2) optionality (3) non-truth conditionality (4) weak clause association (5) initiality (6) orality (7) multi-categorality であるとする。
3. エスノメソドロジーは社会の構成員が日常的な出来事や構成員の組織的な慣行に

ついて持っている知識の体系的研究である (林(編), p.13)。日常的な会話も社会活動の一つで、高度に組織化されている。

4. ① ideational structure (内容の構造) : idea (命題) 間の関係。文と文とのつながりなど ② action structure (行為の構造) : 発話行為との関係 ③ exchange structure (話者交替の構造) : 話者 A が質問したら話者の交替が起こり B が答えるなど ④ information state (情報の状態) : 話し手と聞き手が持っている知識がどれくらいのものなのか、共有しているのか ⑤ participation framework (参加者の枠組み) : 話し手と聞き手の関係や話し手と発話との関係。後者は、話し手が自分の発話を自己訂正し、さらにやりとりを展開させるようなこと。
5. 話し手が会話を終結させようとしても、必ずしも成功するわけではない。Schegloff & Sacks (1973, p.314) では、“Closing is the central possibility, further talk is alternative to it.” とある。
6. 前の話題が終了した後、沈黙が生じたり相手が uh などと口ごもりの反応を示した時に、応答詞的に so が単独で用いられることがある。この場合、話し手が相手に何らかの行動を起こすことを促す気持ちが示されることがある (Raymond 2004: 192-193)。

参考文献

- Aijmer, K. 2002. *English Discourse Particles: Evidence from a corpus*. Amsterdam: John Benjamins.
- Blakemore, D. 1987. *Semantic Constraints on Relevance*. Oxford: Blackwell.
- . 2001 / 2004. “Discourse and Relevance Theory.” In Schiffrin, D., D. Tannen and H. E. Hamilton (eds.) *The Handbook of Discourse Analysis*. 100-118. Massachusetts: Blackwell.
- Bolden, G. B. 2009. “Implementing incipient actions: The discourse marker ‘so’ in English conversation.” *Journal of Pragmatics* 41, 974-998.
- Bordería, S. P. 2006. “A functional approach to the study of discourse markers.” In Fischer, K. (ed.) *Approaches to Discourse Particles*. 77-99. Amsterdam: Elsevier.
- Fischer, K. (ed.) 2006. *Approaches to Discourse Particles*. Amsterdam: Elsevier.
- Fraser, B. 1990. “An Approach to Discourse Markers.” *Journal of Pragmatics* 14, 383-395.

- . 1997. “Commentary Pragmatic Markers in English.” Appear in *Estudios Ingleses de la Universidad Complutense* 5.
- . 1999. “What are discourse markers?” *Journal of Pragmatics* 31, 931-952.
- . 2006. “Towards A Theory of Discourse Markers.” In Fischer, K. (ed.) *Approaches to Discourse Particles*. 189-204. Amsterdam: Elsevier.
- Halliday, M.A.K. and R. Hasan. 1976. *Cohesion in English*. London: Longman.
- 林宅男 (編著). 2008. 『談話分析のアプローチ：理論と実践』東京：研究社.
- James, D. 1972. “Some Aspects of the Syntax and Semantics of Interjections.” *CLS* 8, 162-172.
- Jucker, A. H. and S. W. Smith. 1998. “And people just you know like ‘wow’ : Discourse Markers as Negotiating Strategies.” In Jucker, A. H. and Y. Ziv (eds.). 1998. *Discourse Markers: Descriptions and Theory*. 171-201. Amsterdam: John Benjamins.
- Jucker, A. H. and Y. Ziv (eds.). 1998. *Discourse Markers: Descriptions and Theory*. Amsterdam: John Benjamins.
- Labov, W. 1972. *Sociolinguistic Patterns*. Philadelphia: University of Pennsylvania Press.
- Lakoff, R. 1975. *Language and Woman's Place*. New York: Harper & Row.
- 松尾文子. 2010. 「談話標識の特質：単独で用いられる談話標識を手がかりに」『論集』43, 43-54. 梅光学院大学紀要編集委員会.
- . 2011. 「談話標識の談話戦略的使用」『論集』44, 63-79. 梅光学院大学紀要編集委員会.
- McCarthy, M. 1991. *Discourse Analysis for Language Teachers*. Cambridge: Cambridge University Press.
- 中島平三 (編). 2005. 『言語の事典』東京：朝倉書店.
- Raymond, G. 2004. “Prompting Action: The Stand-Alone ‘so’ in Ordinary Conversation.” *Research on Language and Social Interaction* 37(2). 185-218.
- Sacks, H., E. Schegloff and G. Jefferson. 1974. “A simplest systematic for the organization of turn-taking for conversation.” *Language* 50(4), 696-735. (西阪仰訳 『会話分析基本論集：順番交替と修復の組織』世界思想社 2010)
- Schegloff, E. and H. Sacks. 1973. “Opening up Closings.” *Semiotica* 4, 289-327.
- Schegloff, E., G. Jefferson and H. Sacks. 1977. “The preference for self-correction

- in the organization of repair in conversation.” *Language* 53(2), 361-382. (西阪
仰訳『会話分析基本論集：順番交替と修復の組織』世界思想社 2010)
- Schiffrin, D. 1987. *Discourse markers*. Cambridge: Cambridge University Press.
- , 2001 / 2004. “Discourse Markers: Language, Meaning, and Context.” In
Schiffrin, D., D. Tannen and H. E. Hamilton (eds.) *The Handbook of Discourse
Analysis*. 54-75. Massachusetts: Blackwell.
- Schourup, L. 1999. “Discourse markers.” *Lingua* 107, 227-265.
- Sinclair, J. and M. Coulthard. 1975. *Towards an Analysis of Discourse*. Oxford:
Oxford University Press.
- Sperber, D. and D. Wilson. 1986, 1995². *Relevance: Communication and Cognition*.
Cambridge: Cambridge University Press.
- 高原脩. 1998. 「談話標識研究の動向と展望」『現代英語の語法と文法』252-260. 東京：
大修館.
- Urgelles-Coll, M. 2010. *The Syntax and Semantics of Discourse Markers*. London:
Conitnuum International Publishing Group.
- van Dijk, T. 1979. “Pragmatic Connectives.” *Journal of Pragmatics* 3, 447-456.

引用作品

[映画]

Maid in Manhattan. 2003. 株式会社スクリーンプレイ.

27 Dresses. 2009. 株式会社フォーインスクリーンプレイ事業部.

[小説]

Client. 1993. John Grisham. Island Books.

The Constant Gardener. 2001. John le Carré. Pocket Books.

The Da Vinci Code. 2003. Dan Brown. Doubleday.

The Sky Is Falling. 2001. Sidney Sheldon. Warner Books.

[その他]

Macmillan English Dictionary. 2007². 南雲堂フェニックス.